

平成 21 年度山梨大学附属図書館医学分館地域貢献事業  
生と死のコーナー関連行事

講演会 ホスピスは何処へ行ったのでしょうか  
— チャプレンの立場から —

講師 齋藤 武 氏

(山梨英和・韮崎英和・石和英和幼稚園園長、山梨英和大学講師)

場所 山梨大学医学部キャンパス 臨床講義棟小講義室  
日時 平成 21 年 10 月 8 日 (木) 18 : 30 ~ 20 : 00  
主催 山梨大学附属図書館医学分館

僕が今日お話をさせていただくのは、個人的な経験を通して考えていること、ホスピスはいったい何処へ行ってしまったんだろうということです。確かに今、日本にも沢山のホスピスや緩和ケア病棟と称される施設は存在してはいます。しかし、本来のホスピスが目的としていたものとは少し変わってしまい、寂しい思いがしています。

ところで、僕は元々日本の大学では農学部を卒業し、農学士なのですが、農業に従事することに自信が全くありませんでした。もともと家も農業とは全く関係なく、都会で育った人間で、ただ大学案内を見ている時に、広々とした草原で牛が草を食んでるから、こんなところに行ってみたいなという旅行気分で農業の学校に行ったものですから、卒業するときになっても同級生たちはみんな自分の学んだことを生かす道に進むという明確な意思を持っていたようですが、僕はそんな自信が無く、なんとか逃げる方法ばかり考えていました。そんな自分から恥をかかずに逃げる方法は、勉強を続けるということでした。

僕が4年間農業の勉強をしている間に、たまたま座った机の中に一冊、とても綺麗な教科書があったんです。英語の教科書で、綺麗というのは紙と写真が綺麗だったんです。その本を、誰が忘れて行ったか知らないけれど、あんまりきれいだから、そのまま家に持って帰ってしまいました。それで、卒業間際になって逃げ道を探していた時、その教科書を書いた方がフロリダ大学の農学部の先生だと解ったものですから、その先生に手紙を書いたんです。「勉強したいんだけど、お金が無いので奨学金を出してくれませんか？」という手紙を出しました。そうしたら、TOEFLという英語の試験を受けて通ったら奨学金を出してくれるという返事が来ました。

それで、農業だけでなく英語も苦手だったものですから、英語の勉強をしなくてはい、慌てました。卒業前の、4年生の夏ごろからでしたかね。中学校から高校までの英語の教科書を買ってきて、6年間の英語の教科書を丸暗記するくらいに、毎日英語の勉強をして

いました。それで何とか、フロリダ大学の方から入学を許されました。

そのフロリダ大学にいる時に、そろそろ卒業の頃でした、一週間のうちに僕の身近なところで殺人が3つありました。

ひとつは、キャンパスのそばに、学生たちをあるキリスト教会が無料で日本人とアメリカ人と黒人と一緒に住まわせてみようというプロジェクトに参加して、その教会に3人で住んでいた時のことでした。その寮の隣が空き地で、その向こう側に「クリスタルバーガー」という店があって、10セントのハンバーガーがあったんですよ。その頃マクドナルドが29セントだったんです。3分の1くらいの学生用の安いハンバーガーのお店で、キャンパスのすぐそばで24時間営業をしている店でした。卒業試験を前に一生懸命している夜中に、鉄砲の音が聞こえたのです。始めは、「誰かが戦争の映画かなにか見てるのかな、のんびりしてていいなあ。」などと思っていたのですが、警察のパトロールカーのサイレンの音がして目の前で止まりました。そうなるも勉強も手につかずルームメイトを誘って外に飛び出しました。そして、そのクリスタルバーガー店の床に男性が1人倒れているのが眼にとまり、倒れた体の下から血が流れて出ていました。初めて射殺死体というのを見て、とても震えるような思いをしました。

それから、南米から来ていて、同じクラスで勉強していた学生が、奥さんにピストルに撃たれて死んだということがありました。

それから、また2、3日して、キャンパスに止めている車から誰かがバッテリーを盗もうとしていたところに、その車の持ち主が帰ってきて、ピストルで撃ったという事件がありました。

そういう出来事を目の当たりにして、「人間ってこんなに簡単に死んでしまうのか。」「人間、なんで生きてるんだらう。」などということを深刻に考えました。キャンパスの中で日本人は一人でしたし、日本語をしゃべる相手もない環境もあって、とても孤独感を覚え

ました。こんなに人が殺されたり、死んでいく殺伐とした世の中で、農業、食べることだけを考えていて人は生きていけるものなのだろうかと悩みました。そんな時、小さいときに連れて行かれた教会では、「共に生きなさい。」だとか「愛し合いなさい。」だとか、「相手を思いやって」だとかということを、説教で聞かされていたことを思い出したのです。

それで、食料品ばかり、食べることばかり考えないで、人間がこんなに簡単に死んだり殺されたりする中で、愛だとか思いやりといったことを記している聖書について学んでみたいと強く感じて、エモリー大学というところの神学部へ進みました。

アメリカの神学校というのは、医学部の先生もいらっしゃるけれども、神学部と医学部とそれから法学部、その 3 つは大学を卒業しないと入れてくれないのですが、大学院とは言わずに、プロフェッショナルスクールと呼んでいます。プロフェッショナルスクールとは何のプロフェッショナルかというと、人の援助の専門家です。苦しんでいる人や悩んでいる人の援助の専門家で商売ではありませんので、広告や看板を出していません。アメリカに行くと、おそらく皆さんが日本の駅などで見るようなクリニックや診療所の看板などは見かけません。

このプロフェッショナルスクールは入れてくれてもなかなか卒業させてくれません。僕たちの学部でも、1年間で 60 点以下がいくつかあったらもう即刻退学でした。例えば、一軒家を借りて一緒に学んでいたインディアナから来たとても真面目な学生がいましたが、入学後すぐの 1 学期が終わった時に、学校からハガキ 1 枚来て、「来なくてよろしい、ついでにはこれとこれとこれがこういう点数だから。」と、それだけです。それで、彼は荷物をまとめて帰っていきました。いろいろな理由はありましたが、一軒家を借りて共に学んでいた 4 人の仲間たちの中で、僕一人だけが卒業する寂しい結果になりました。そんな具合で、皆必死でノートを取り本を読み、レポートを書く日々で、何処に思いやりや愛があるのだろうかと思うような神学部の学びでした。

また、プロフェッショナルになるのが目的の学部ですから、入学と同時に一人ひとりの学生に対して、「この人間は人の援助をするために資格を取っていい人間かどうか」を卒業まで見守りつづける「プロフェッショナルアサストメント」が設けられます。それは学生1人につき同級生が1人と先輩が1人とそれから教授が2人ついて、学業の成績はもちろん、日ごろの言動などについても、牧師として、またカウンセラーとして適しているか否かを卒業するまでずっと見ていてくれるシステムなんです。その僕のプロフェッショナルアサストメントのグループの人たちが、僕が卒業するのに修士論文を読んでくれて、「君の論文は結構。理屈も意味もよくわかります。でも、あなたの論文にはちっとも心が感じられません。」と言うわけです。「心が無いような人間が、人間の援助なんかできません。」って言うわけです。

それまでは成績や理論ばかりの話でしたのに、最後卒業の時になって、心がわからないような人間が人の援助なんかできるわけありませんから、牧師やカウンセリングに携わる人の援助の専門家になりたいのであれば、「人間のことを勉強してきなさい。」と言われました。どうやって人間について学べば良いのかを問いましたら、明日から教室に来なくていいから、病院に行きなさいと言われて、病院での実習を始めることになったのです。

病院というのは、一日の中に人間の誕生から死までが存在しています。今から子ども産むぞって思っている若いお母さん、それに付き合っ来ているご主人がどんな気持ちでどんな思いでそこにいるのか。外来で今、検査結果を待っている患者さんが、どんな気持ちでどんな思いでそこにいるのか。残念ながら癌だと診断された患者さんが、どんな顔をしてどんな思いで、どんな気持ちでそこで生きているのか、それをしっかり見て人間について学んでこいと言うわけです。家族が5人で一生懸命「がんばろうね。」と支えあって来た

けれど、夜中に大黒柱を失って、残された家族 4 人が、病院からどんな思いで、どんな気持ちで、どんな足取りで帰っていくのか、そうした人間の心や思いをしっかりと勉強して来いというわけです。そうした人間の思いや言動の意味を知らずに、どうしてそうした、いろんな状態で苦悩する人間の援助ができるんだって言うわけです。僕が学んだエモリー大学の神学部では、こうした学びを臨床牧会教育と言って、必修科目の 1 つでした。こうした人間の学び無くして牧師にもなれないし、カウンセラーにもなれないということです。僕は、こうした人間への理解を深める学びは、神学部だけでなく医療に従事する人間の援助の専門家たちにとっても必要なことだと思っています。

アメリカの教育というのはすごいなと思います。臨床牧会教育の現場、病院に行くとスーパーヴァイザーの先生がいて、5、6 人の神学生たちがいるわけですが、初日にスーパーヴァイザーの先生が、「君は何処の病棟持ちたいんだ？」といきなり問うて来るのです。僕の思いの中には、別段病棟での実習を希望したわけではなく、行かないと卒業させないと言うから来たのであって、「早く卒業させてくれればそれに越したことは無いのに、持ちたくないのに行けて言うから来た。」という、怒りがありました。ですから、そのスーパーヴァイザーの先生に、「一番難しいところをください。」と言ったんです。すると、スーパーヴァイザーの先生が、「一番難しいところは何処なんだ。」と言うので、最初の抵抗でマイナス 5 点くらいあるかなと思い、60 点以下を取ってクビと言われても困るので、一番難しいところは何処だと言われていろいろ考えました。その頃も癌での死亡率が一番だと報道されていました。亡くなっていく人たちに希望や夢を語るのは難しいだろうなと思い、「癌病棟をください。」と応えたのです。そうしたら先生が「いいよ。」と言うわけです。ただ、ついては、700 床くらいの大学病院でその癌病棟だけだとインターン生全部でカバーできないから、もう一病棟持ちなさいと言うわけです。で、何処持ちたいんだって言うわけです。それで、「2 番目に難しいところをください。」と言ったのですが…。「2 番目

は何処なんだ。」と先生が聞くので、いろいろ考えて、訳のわからないことをしゃべる人に、  
「人生の意味とは」などを話し合うのは難しいだろうと考え、「精神科の病棟をください。」  
と答えると、それも「いいよ。」って言うわけです。そして、それぞれの受け持ちの病棟  
は実習生たちが選択して決定するのです。つまり、人間であるということは、いつもあれ  
かこれかという意味決定を自己の責任で下さなければいけないという学びを始めに身をも  
って学ばされました。それからスーパーヴァイザーが、それぞれの実習生たちが自分で選  
択した病棟に連れて行ってきて、そこの婦長さんだとか担当医だとかを紹介してくれま  
したが、アメリカ人の顔ってみんな同じような顔をしているし、名前もみんな同じような  
名前だし、緊張して何をどのようにすれば良いのかも解らないまま初日が終わりました。  
そして、明日朝8時に出勤しなさいというわけです。

翌日、8時前に出勤したら、病棟から電話がかかっていた。「今朝方、患者さん  
が亡くなってご家族が会いたいって言っているんだけど、この病棟の担当は誰ですか。」  
ってチャプレン事務所の秘書が言うのです。癌病棟からの電話でしたので、「僕です。」と  
応えたら、「家族がこう言っているから、行ってください。」と、秘書が言うわけです。

そう言われても、何しろ初めてのことで、病棟に行き、家族の方に顔を合わせて何  
て言ったらいいのか、どんな声をかけていったらいいのか、頭が真っ白で何も出来ない状  
態でした。だから、「スーパーヴァイザーが来るまで待ってください。」と言って何とか引  
き伸ばしている間にもまた「まだ来ないんですか。」と病棟から催促の電話がかかってきま  
す。で、そうこうしているうちにスーパーヴァイザーがやってきたので、「僕は今日が初日  
の学生ですが、癌病棟から呼び出しがかかっているんですが、どうしたらいいでしょうか。」  
って尋ねたわけですが本音は、「行きたくない」という表現ですよね。そんな僕の本音を知  
ってか、スーパーヴァイザーは、「君の病棟だろ。行ってきなさい。」と言うわけです。

そこで行かなければ、「マイナス 10 点」とマイナスが増えてくると思う不安で、行こう

と思うけれども、何て声をかけて入っていったら元気づけられるのか、勇気づけられるのかわからないし、足がすくんで動けないといった感じでした。ですから、スーパーヴァイザーに「今日が初日だし、こういう状態のときに、先生、どう声をかけていったらいいか教えてください。」と言いましたら、先生は、「Let it be」って言うんですよ。ああそうかと思っただけで、不安がいっぱいで動けません。それでもこのままじっとしているとマイナス 15 点だとか 20 点になってしまうと焦るのですが、やはり足が進みません。チャプレンを呼んでくれと言ったんだから、「聖書を読んでくれ。」って言われたらどうしようと 1 人いろいろと思い悩んで、不安を募らせていくのです。

そこでまた先生に、「聖書の何処の箇所を読んだらこういう状況のときはいいんですか、家族の人を勇気づけられるんですか？」と尋ねました。すると、スーパーヴァイザーがまた「Let it be」って言うんですよ。ああそうかと思っただけで、さあ行こうと気を取り直して、聖書を読んで仮にその残された家族が泣いたり怒ったりしても、「すいません。聖書に書いてあって僕の責任じゃないですから。」と言いつつはできそうだと思うのですが、やはり動けません。今度はチャプレンだから「お祈りしてくれ。」って言われたら聖書を読むようなわけにいかないから、また自分の中で不安が膨らんでいくのです。しかし、いつまでも行かないわけにはゆきませんので、「先生、お祈りしてくれって言われたらどんな言葉を使えばいいんですか？どんな言葉を使えば、傷つけずにいられるのか、勇気を与えられるのか。それを教えてくれたら、僕、行きます。」と言ったら、またスーパーヴァイザーが「Let it be」って言うわけですよ。言ってみれば「あるがままで行って来い。」というわけですね。あまり抵抗したり、病棟からの呼び出しに応じないと、「もうこの学生はクビ」ということになって、卒業できなくなったら困るので、しぶしぶエレベーターに乗り、上に上がっていきました。

エレベーターを降りたら、チャプレンを待っている様子で白衣を着た若い医師がいまし

た。エレベーターを降りるなり、日本語で言ったらこう言ったと思いますが、「お前坊さんか？」と問うのです。「そうだ。」と応えると、「自分は研修生で上の先生がまだ来ていないので家族の方に伝えなければいけないのだけれど、人が死んだことなどを話すのは坊さんの方が慣れているだろうから、お前言ってくれ。」と僕に言うのです。二人とも初めてのことでパニック状態だったのです。そう言われて僕はいろいろと考えた末に、彼に、「神学部というのは、生だとか死だとか生きることだとかの意味は勉強するけれど、人が死んだか死なないかの判定は勉強しないんだよ。それは君たち医学部で勉強することだから、君が言えよ。」と言うと、困ったような顔をしていた彼も「それはそうだな。じゃあ一緒に行こう。」ということになり、2人で家族の待つ病室に行ったのです。

しかし、彼は戸を開けるなり、「思い切りやったんですが…。」と言ってそのまま出て行ってしまいました。一人僕はポツーンと残されて、もう今更「おはようございます」でも「ご愁傷様」でもないですし、何と云えば良いやら解らず緊張感いっぱい声かけられなくてじっとしていました。

その部屋には、一人の老婦人がベッドのそばに無言で佇んでいました。そして、その人が見つめるベッドの上には、年のころが同じくらいの婦人が、横たわっていました。とっても弱々しくいまにも崩れ落ちそうに佇んでいるその婦人を目の前にして、「かわいそうだな、抱きしめてあげたい。」と思いましたが、でも抱きしめたりしたら、お年寄りといえども女性だし、個室だし、「触らないで。」って病棟中が騒ぎ出したら、それこそ「マイナス10点」どころじゃ済まなくなるし、などという思いが頭をかすめ、ますます動けません。それにしてもこのままじっと突っ立っていても、出席点にもならないし、と勇気をふるって、その人のそばに歩いていきました。

そして横たわっているご婦人を見た時、僕がチャプレンとして初めて言った言葉なんですけど、「まるで眠ってるみたいですね。」って思わず言ってしまいました。で、そう言っ

ですぐに、「お前 30 年近く生きてきて、日本で学び、フロリダで勉強して、神学部で苦勞したのに、そんなことしか言えないの。」と、自分で自分を責めました。そんなことしか言えない自分がとても恥ずかしく思えて、婦長さんが聞いたら、「あの人今まで何勉強してたのよ。まるで子どもみたい。」と笑われそうで、とても恥ずかしくて顔から火が出る思いでした。

でもそうしたら、そのご婦人が、「そうなんです。それだけが救いなんですよ。」って涙を流し始めたんです。その涙を見て、「ああ抱きしめてあげたい、崩れ落ちそうだな。」とまた思うのだけれど、同時に頭の中で、「チャプレンは、悲しんでいる人を勇気づけてあげるものなのに、泣かせてしまった僕の言葉を婦長さんが来て見て、『あのチャプレンは何をしてるの。家族泣かしてしまっ！』などとスーパーヴァイザーに報告したら、これはもう大きなマイナス点になるだろうな。」なんて自分を守ることばかり考えていたように思います。それでも、静かに涙を流しているその人の姿を見ているうち、どうしてだか知らない間に、彼女の肩に手を回していました。そしたら僕の肩に頭を乗せて泣き方がとても激しくなりました。それが僕の初めての遺族との出会いでした。それから、幾度と無くその日の経験を省みていますが、いまだにその部屋をどういう挨拶して出てきたのか全く記憶にありません。全く記憶に無いぐらい緊張していたのだと思います。癌病棟というのはそういう出会いが毎日毎日続くのです。

当直で真夜中の病棟を歩いていると、ベッドに臥せている患者さんと目が合い、何かを訴えるような様子に引き込まれるように部屋に入っていくと、突然手を握られて「一人で死にたくない。」とか。「私の本当の病気は何なの。」とか尋ねられる。その度に何て答えていいかわからず、自信を無くしてしまいます。そうした日々が二、三週間も続くと、もう僕は生きていけないなあと思いました。「なんにも出来ない、能無し。」無意味な存在ではない自分が情けなくて仕方がありませんでした。「もういい。」と、つくづく思いました。

「人のために役に立とうと思ってこうやって勉強してきたけれども、僕はもう人と話も

出来ないし、何て声をかけていいかわからない。自信がなくなるばかりでこのままだととてもじゃないけど生きていけないから、もうやめよう。卒業なんかしなくていい。」と思いついて、スーパーヴァイザーに話しに行きました。「僕はもう卒業しなくてもいいからやめようと思う。」と。そうしたらスーパーヴァイザーが、その時は「Let it be」とは言わずに、「そうか、今までの 30 年が全く無意味な人生だったら、あと一週間無意味な人生、日々を送ってもそんなに無駄にならないだろう。一週間くらいしっかり考えてから決めたらどうだ。」と言われて、「それもそうだな、今までの 30 年が無駄で意味が無かったのだから、これから一週間無駄な時間を生きても大して変わりはないな。」と思ったのです。

それでも、出席点だけは取りにいこうと思って病棟には行っていました。癌病棟 ICU に行っていれば、患者さんはマスクをしているし声をかけることも無いし、ものをしゃべらなくて済むから、そこに行って顔だけを見せていました。もし仮にスーパーヴァイザーが「うちの学生どうだ。」って言ったら、「来てましたよ。」で、出席点だけは取れるかなあと考えて、卑し心です。

そんな ICU で、一人、まだ 50 にやっとなったばかりのご婦人がマスクをかけてベッドに横たわり、そのお母さんがいつもそばに座っていた人がいました。その人のところで僕は深刻そうな顔をして、患者さんの顔をよく眺めていました。僕はそこに逃げていたのです。そして、もうやめようと思っていたある夜、「あの人の顔をもう一回見に行こう。やめたらもう会うことも無いだろうから。」と思って、夜中に行ったことがあるのです。そうしたらその人が、緩解期というんですかね、マスクをはずしてベッドの端に座っていらっしやっただけです。驚きました。そうしたらいつものようにそばに座っていたお母さんが、「この方ですよ。あなたがずっと意識がなくて苦しんでいる時に、いつも来てくれてお祈りしてくれていたのは。」と、患者さんに話されるのです。

事実は、お祈りなんかしていないんです。僕は自分の自信の無さから逃げだして、深刻

そんな顔をして俯いていただけなのです。でも、そうしたらその人が、「そうですか。今日も私のために祈ってくれますか？」と、言われたのです。その時には僕はもうやめようと思っていたから、点数のことや他者の評価などはもう気にしてもしようがないと思っていましたので、心のままに、「どんなことをお祈りしたらいいですか？」と伺ったのです。すると、ご主人のこと、大学生の二人の息子たちのこと、お父さんお母さんのことなどを話してくださいました。ですから、彼女が話してくれたことを僕は復唱するような形で、「一緒に祈りましょう。」と言って手を重ね合わせて一緒に祈って、その夜は別れて帰りました。翌日彼女は「死ぬのは家で死にたい。」と言って退院していきました。しかし、退院したけれども急変し、病院に戻ってきて、受付に来るなり「あのチャプレンを呼んでください。」と僕を呼んでくれたのです。僕はその頃、役立たずで能無しで、生きるに値しない存在なのだから、せめて人から求められたらどんな地の果てでも行こうと思っていたから、すぐに行きました。そうしたらその人が、「私は、ここに死にに来た。」と言うのです。答えようがありませんでした。「ここに死にに来たので、これから主人や子どもたちに別れの挨拶をするので一緒にいてください。」と言うのです。

彼女は、初めにご主人を部屋に招き入れ、「あなたまだ若いから再婚してね。」など沢山のことをお話して、「ありがとう。」とお別れを言うのです。二人の会話を聞いていて、僕は何も出来ず、ただ涙が出るばかりでした。それから二人の息子さんが入ってきて、「お父さんにもこういう話をしたんだけど、お父さんを支えてあげてよね。」などなどと話しているのです。僕は一言もものを言えずにそこにずっと突っ立って、涙を流しているだけでした。

その経験もまた、僕にとってやはりもう止めようという思いを強くさせるだけでした。ただ涙を流しているだけでなにも出来ないし、無力感でいっぱいでした。

そんな時、最初の日に出会った婦人から電話がかかってきました。「自分たちの通う教会

にも牧師さんはいるけれど、あの時の私とお姉さんの気持ちを一番わかっていてくれた人だから、姉の埋葬をして欲しい。」ということでした。留学生で貧乏な学生ですから、車なんかありませんでした。ありったけのお金を持って、タクシーで墓地まで行き、埋葬のお手伝いに行きました。それから先ほどの、ICUで出会った患者さんのご主人から電話があり、お葬式で亡くなった妻と家族のために聖書を読んで欲しいと頼まれました。

そんなことを朝の症例検討の時間にスーパーヴァイザーや仲間たちに報告したりしていると、仲間たちが、「君は自分で駄目だ駄目だって言ってるけど、君の存在をありがとうって言ってくれてる人たちがいるじゃないか、どうして素直に現実を見ないんだよ。」と言ってくれるのです。しかし僕は自信も無く無能だと僻んでいましたから、「やめるやめるって言ってるから、何とか宥めようとして、子どもに飴玉あげるみたいなことを言ってくれるんだな。」と思うだけで、やめていくことばかり考えていました。でも、仲間たちの言葉やスーパーヴァイザーの助言や患者さんや家族との関わりを通して、僕が自分で考えていた理想の援助者、チャプレン、カウンセラーはこうあるべきだということからは欠けるところばかりの自分だけれど、現実の自分はこれしか無いのだから、生きていくためには、この現実から始めなければと気付かされました。若い女性の患者さんが死を前に話してくれたことですが、付け睫毛したり化粧したりしないで素顔のまま生きていくことの難しさと大切さを知りました。

その後インターンを終えて、牧師として教会を持ったのは3年だけです。あとはずっと病院の中でチャプレン、牧会カウンセラーとして生きてきました。

3年間、病院を離れて教会で働いた理由は、スーパーヴァイザーの資格を取ろうと思い、面接試験を受けたら、スーパーヴァイザーたちに拒絶されました。人から評価され、拒絶されるというのはとても淋しく辛い話です。ただその時のスーパーヴァイザーたちの理由

が、「君は病院での患者さんと家族しか知らない。」ということでした。普通の人たち、病院の外で生きている人たちがさまざまな苦しみや悲しみに出会い、どんな思いで生きているのか、しっかり見て学び、人間とはどんな存在なのかを知ることが援助につながることを直接指摘されたわけです。それで 3 年間、病院を離れたところで、人間について学ぶために教会で牧師として働きました。

そこで僕がつくづく感じたのは、変な言い方ですが、患者さんたちは心が健康だということです。悲しかったら悲しい、苦しかったら苦しうって正直に話せるんです。ところが、患者さんと違って、健康そうに生きている人たちは、顔で笑って心で泣いてというのでしょうか、患者さんのように正直に話せない人が多いのです。病院の外にいる人たちは、心が不健康だなと思いました。そして、一度きりの人生なのだから、そういった心が健康な人たちと共に僕も正直に残りの人生を生きたいと思い、病院に戻り、スーパーヴァイザーの教育を受け、チャプレンとして生きてきました。

エモリー大学の病院でのインターンを終え、スタンフォード大学病院でチャプレンをしている頃に、イギリスのホスピスがアメリカの新聞に掲載されました。近代ホスピスがイギリスで始まったのが、1967 年で、それから 10 年ほど後の 1976 年頃の話です。その頃のイギリスのホスピスの平均入院日数が 14.55 日でした。僕は生きて悩み苦しんでいる人間の援助に携わるのであって、死んでゆく人との 2 週間で何が出来るのか疑問を感じていました。ところが、スタンフォードの病院でもホスピスを研究する委員会が出来て、チャプレンという立場上、その研究会に出席を求められ、ホスピスに関わるようになりました。それから既に 30 年の時が過ぎました。

そんなこともあって、静岡県浜松にある福祉事業団の理事長さんが、スタンフォードまで尋ねてきてくださって、ホスピスを日本でも作りたいので、帰国して手伝って欲しい

と誘われました。夏休みを利用してセント・クリストファーズ・ホスピスに行って勉強させていただいたりしており、医師やナースやケースワーカーやチャプレンなどが一丸となって患者さんと家族を支えていける病院が日本にもあれば良いのにと思いましたので、その理事長さんの情熱に感動を覚えながら日本に帰ってきたんです。1978年のことです。

帰国してすぐに、セント・クリストファーズ・ホスピスの写真やスライドなどを紹介しながら、その福祉事業団の病院の医局の先生たちにホスピスの話をさせてもらいました。しかし、ホスピスのことを初めて聞いた医局の先生たちからは、袋叩きにあった様な感じでした。「自分たち医師は葬儀屋の一步手前じゃないんだよ。そんなことを医師はやらない。」というのが、その頃の大方の医師たちの反応でした。

同じ頃の、僕の出会ったアメリカの医師たちの反応は、「ホスピスというのは、自分たち医師の行う医療の、あるいは病院の原点に戻る事なんだ。」という反応で、日本とは随分と違いました。

その原点についてですが、イギリスでホスピスを始めて開設したシシリー・ソンドースさんも、ホスピスの設立の根拠を、新約聖書の中の「マタイによる福音書」の25章の35、36に置いています。そこには、「あなた方は、私が空腹で飢えていた時に私に食べるものを与え、私が乾いていた時に私に飲ませ、私が旅人であった時に私に宿を貸し、私が裸の時に私に着るものを与え、私が病気をした時に私を見舞い、私が牢にいた時に私を訪ねてくれた。こういう生き方をすることだ。」と記されています。その後のキリストを信じる人たちが、このイエス・キリストの言葉を具体的な形にして、苦しんでいる人や悲しんでいる貧しい人たち、孤独に耐えている人たちを支え、援助する手段として修道院に病棟を作り、医療などを提供したのです。それがホスピスと呼ばれるもので、そこから病院になったのです。ですから、今の西洋の病院の原点は、ホスピスと言っても過言ではないと思います。

フランスにボーンという町があります。そこには、1443年に建てられたホスピスが今でも建っています。大きな教会堂の中に、深紅のカバーをかけた、とてもきれいなベッドが並べられています。傷ついた患者さんが赤い血を見て怖がらないように、赤いカバーをかけているのでしょう。また、どのベッドのそばにも椅子が置いてあります。それは、24時間患者さんを独りぼっちにしなかったということです。それがホスピスの原点であり、医療の精神の源でもあったのです。

そのボーンから少し下に下りたりヨンという町があります。そこでもホスピスを探そうと思って市民病院を訪ねたことがあります。その大きな市民病院の古い部分に「ホスピス」があり、そこから、外科病棟、内科病棟、いろんな病棟が出来て、大きな今の病院になったのがよく解ります。つまり、病院の出発点がホスピスというわけです。ボーンのホスピスにも、外科の道具が沢山置いてあります。薬剤庫も沢山の薬が並べられていました。

西洋の病院の原点は、修道院がイエス・キリストの言葉を実践するべく、修道僧たちが医学を身につけ、患者さんの心と体の治療にあたっていたホスピスでした。

さて、そろそろ近代のホスピスに話を戻したいと思います。近代ホスピスの生みの親であるシシリー・ソンドースさんもホスピスの設立の根拠とした聖書の言葉を、今の時代の患者さんを見るまなざしとして考えたいと思います。

「飢え乾いて空腹な人」は何に飢えているのか、ということをお患者さんの立場になって考える時に、シシリー・ソンドースさんは、『「癌の末期でもう手の施しようがありません。だから転院してください。』と告げられて居場所の無い人や、受け止めてくれる人がいない人たちは、愛に飢えている。』と理解し、ホスピスは決して断りません。お金があっても無くても、手の施しようが無いからと言って、決して断らず、受け入れるという姿勢を守っています。ただし、イギリスでは人口30万人くらいのところでベッド数25床と考え、家族の人たちがすぐに来れる範囲の人たちのためのホスピスになっています。ホスピスでは

断らない。愛に飢えている人に愛を与えることを目的としています。

「私が乾いている時に飲ませ」というのは、「乾いている砂漠のようなところで無味乾燥な死を待っているだけのような人生に、意味を共に考え、意味のある生を生きる援助を提供する場」がホスピスというわけです。

「私が旅人で」というのは、私たちはみんな旅人です。そして患者さんもそうなのです。今まで治すための医療の旅を続け、治らないということになり、旅の仕方が変わります。旅人には、明日何が待っているかわかりません。どの道を行っていいのかわからないのです。だから、そういう人たちの道先案内になって支えていくのがホスピスというわけです。シシリー・ソンドースのセント・クリストファーズ・ホスピスというのは、聖クリストファーが、小さな子どものイエスを背負って川を渡っている姿をシンボルとしています。川は急な流れのところもあるし、窪んだところも、石がごつごつしたところもあります。「死」というところに向かっている患者さんとその家族にとって、初めて経験する様々な出来事に悩み苦しんでいるのです。ですから、専門家たちが共にいて、死と死別という大切な時の援助をするのがホスピスなのです。何も解らず不安でいるよりも、自分はいま何処に向かっているのかを知っている方が、安心できるのではないのでしょうか。皆さんも旅行してどうですか？外国に行った時など、明日は何番線のどれに乗るか全くわからなかったら不安にならないのでしょうか。インフォームドコンセントも、そう考えると、とても大切なことだと思います。

「私が裸であった時、私を着せ」という言葉は、今、皆さんが使っている「緩和ケア」という言葉とも関係があります。パリアティブ(palliative)という言葉ですが、ここに出てきている「裸でいた時に着せ」の、マントを着せるということなのです。裸でいるのは寒いから着せようということだけではなく、病院や診療所などでは、患者さんは裸にされてしまいます。プライバシーがなくなるのです。人は知られたくないこともあるのです。僕も手術を受けたことがあります。術後にスポーツセンターに行ってシャワーを使うとき

にも、他人にあまり傷口などを見られたくないものです。それで、マントで覆ってあげよう、プライバシーを絶対守ってあげるということは、その人の痛みを覆い緩和するというわけです。ですから、セント・クリストファーズ・ホスピスではどんなことがあっても患者さんにカメラは向けさせませんし、顔写真を付けた発表会などしないのです。その人その人を大切にするのがホスピスの務めなのです。日本では、緩和ケアの勉強会や学会や出版物にも患者さんの写真を見せているものも多く見られますが、一人一人の生き方を大切にし、プライバシーを守るといった姿勢にも「本来のホスピスは何処へ行ったの？」という思いがしています。

「私が病気をした時に私を見舞い」という言葉の中には、「私」と「あなた」という関係が示されていると考えています。医者・患者という役割の関係ではなく、人格を持つ一人の人間として関わりあうということがホスピスでもあるのです。

「私が牢にいた時」というのは、チューブで繋がれてベッドから動けないような状態というのは、牢屋と同じだということです。僕は、シシリー・ソンドースさんと初めてお目にかかった時に、「何でホスピスが必要なんですか？同じ薬を使っているのだから、ホスピスでなくても病院で痛みは取れるでしょう。」と質問したことがありました。その時、シシリー・ソンドースさんは、「その通りだ。確かに身体の痛みは取れます。でも家族がバラバラになっているから、家族がひとつになるように支えていかないといけない。だからホスピスを作ったんです。」と話してくださいました。「家族がひとつになって、死や死別といった、家族にとって今一番大事なことを話し合ったり理解し合ったりして、家族が安心して共に生きていけたら、ホスピスは要らない。」とも話していました。それから、「ホスピスの成功だとか成功じゃないだとかは何処で決めるんですか。」とシシリー・ソンドースさんに問うたこともあります。そうしたら、「ベッドが空なこと。」だとおっしゃいました。ベッドが空っぽで患者さんが歩いて、家族と一緒に自分の生き方が出来たら、それが成功だと言うわけです。つまり、チューブで繋がれたり、病院のルールに縛られて「牢にいる」

ような状態では、ホスピスとは言えないということです。

30年前、日本に帰ってきて一人でホスピスの準備に携わった頃は大変でした。市役所に許認可のための指導を求めに行くと、「ホスピスなんていう、そんな言葉は無いから県庁に行け。」県庁に行ったら、「そんな言葉が無いから、(その頃の)厚生省に行け。」と言われて、一年以上そんなことばかりでなかなか進展しませんでした。それでも少しずつホスピスに興味を抱く人たちが多くなり、全国各地でホスピスについての勉強会や研究会が開かれるようになりました。そうした時に、ホスピスのサブタイトルとして使われていた言葉が、「末期患者とその家族のケア」でした。これはシシリー・ソンドースさんがずっと話していた、何のためのホスピスかに繋がる、ホスピスの目的なのです。

それから30年近くの時が過ぎ、ホスピスに関するいろんな勉強会があり、緩和ケア病棟と呼ばれる施設が全国至る所に出来ました。しかし、「末期患者さんとその家族のケア」という言葉はあまり使われなくなっているように思います。学会の抄録や研究会のタイトルに、「痛みのコントロール」といった言葉が多くなっているように思います。それと、「ホスピス」という言葉自体が無くなって「緩和ケア病棟」と言う方がずっと多いです。何故なのでしょう。元来、僕たち人間の中には死の不安や怖さの思いがあり、何とかして死を避けよう、できれば無いことにしたいと思っているからだと思います。

昔から、エジプトのピラミッドも中国でも、人が死んだ時にそのまま死んで消滅すると考えることは、やっぱり不安で怖いことだったのでしょう。だから人間は、死後の世界や霊魂は不滅だといった具合に死なないことを信じながら、何とか死の不安や恐怖を乗り越えようとしていたのだと思います。そして僕たちの人間として受け継いできた遺伝子の中に、死を避けよう避けようという思いがあるんだと思います。そのことの表れの一つが、「ホスピス」から「緩和ケア」へと言葉が変わっていったことだろうと思っています。

このことに関係することですが、世界で初めて大学で「死の教育」(デス・エデュケーション

ョン) という講座をミネソタ大学に開設した社会学者のロバート・フルトン先生に、50 年近く「死の教育」に力を注いできた先生の思いを伺ったことがあります。「どんな理由からデス・エデュケーション(死の教育)を大学で始めたのですか。始めて、その当時と今どんな風変わったと思いますか？」先生は、「今の方がもっと死を拒絶するようになったと思う。」と話されていました。それは一つが、「ホスピス」という「死」を思い浮かべるような言葉から「緩和ケア」と名前を変えて、「イワン・イリイチの死」の様に、死ではなく何かもっと良いことがあるという印象を持たし、死よりも「痛み」に目を向けるようになっていることだと思います。また彼は、「デス・エデュケーションを自分が始めた 50 年前には、死についての話がとにかくタブーだった。しかし、人間には『死』という現実があるのだし、生だけを語り、その半分である死はタブーにして全く無視して避けていたら、本当の人間は何なのかということを考えることができない。安らかに死のうだとか、こういう死に方がいいだとかという教育でもなく、みんなで死はどうしてタブーなのか、そのことを正直に見て、死について学ぶつもりで『死の教育』という講座を開いたのです。」と話をしていました。しかし、日本ではその「死の教育」も「死の準備教育」と呼び方を変えて、死の現実から目をそらそうとしているように思います。

フルトン先生が「死の教育」を始めて 50 年になりますが、やはり人は今も死を避け遠ざけようとしています。癌の末期の患者さんに、「ホスピス病棟に行きますか。」「緩和ケア病棟に移ってください。」と言ったらほとんどの人が嫌います。死に近いところ、死を意識するところを避けようとするのです。それはもう DNA の中にある。お医者さんたち、医療者たちもそうなのだをつくづく思います。「ホスピス」という死を直接連想する場所より、「緩和医療」と言って、痛みをとる医学の場の方が、「死」から遠ざかっていると感じられるのだと思います。そうやって、僕たちは言葉を変え、死そのものから目を逸らすこと、死をタブーにしていくのだと思います。しかし、ホスピスというのは素晴らしい思想だし、医療のあり方だと思っています。ですから、今一度、自分たちの中でどんなに死を避けて

いるのか、何故そうなるのかをみんなも勉強し、学ぶことが大切だと思います。フルトン先生の言うように、人間の現実である死と生をしっかりと見つめる学びが必要だと思っています。

日本でも死をまた強くタブーにして拒絶するようになるだろうと感じたのは、「デス・エデュケーション」、「死の教育」という言葉を「死の準備教育」と変えて、患者さんたちも死の準備教育をしなければいけない、というようなことを勉強会などで話したり発表したりしていることです。患者さんたちは病院に助けをもらいに来たのであって、学校に来たわけではないのに、死の準備教育をして安らかに死ぬ準備を求められるのは、変な話です。

死の準備というのは確かにあります。例えば個々の財産、仕事などなどを整理することは多々あるけれども、死の準備教育を勉強して安らかに死んでいくというのは幻想です。死の現実を避けていこうとしているように思えます。その結果、死の現実には生きている患者さんやその家族の死に対する本当の思いは語るができなくなってしまいます。

例えば、フロイドがグリーフとかということを言いましたが、彼は、悲嘆の行程というのは、6ヶ月か1年くらいだろうと述べています。でも彼は、自分の大切な人を失うという当事者になった時、「この悲嘆というのは6ヶ月とか1年じゃない。一生続くものだ。」と言っています。死ぬまで続く人間の悲しみをマニュアルにして6ヶ月とか、1年とかのグリーフ・ケアなどと言う人もいます。「もう1年たったから元気を出しなさい。」などと、誰であってもそんなことを言う権利はありません。泣いて悲しむ人は、悲しむ理由があるのです。そうした死や死別による悲しみに沈んでいる人たちが、自由に自分たちの気持ちを表現し、それを受け止め理解し、支えていくためにホスピスが出来たのに、名前を変え呼び方を変え、その上死の準備教育を施して、死の不安や恐れを一人耐えることを強いてい

るように思います。それはそれで、死を意識しないでいられる人たちにとっては楽なことかもしれません。でも、死を意識して生きている患者さんやそのご家族など、当事者たちにとってみたら、これほど冷たい社会は無いことでしょう。周りの人たちは死や苦しみを避けて通りたいでしょうが、避けることが出来ない人たちがいるのです。縁起が悪い話。4や9は縁起が悪いとか3人で写真を撮ったら真ん中の人が早く死ぬだとか言って、死を避けていけるのでしょうか？そんなことは当事者でない人たちの言う話です。死を避けよう、痛みを無いようにしようという社会にあっては、当事者たちは、不安や苦しみを誰にも話せず、孤独の極みで死に向き合っているのです。

例えば、癌の末期で入院している人がいました。その方の奥さんと娘さんから、「2年ほど闘病してきて、もうそれほど残されていないのだけれど、病名も話していないし、病室に入る前に泣いて、笑顔で入って行って、で、またとても辛くなったらトイレへ行ってトイレで泣いて、また平気な顔して見舞いに行っていますが、もう耐え切れない。どうしたらいいだろう。」と相談を受けたことがありました。

それで、僕がその方のお部屋を訪ねたときに、ご主人である患者さんが奥さんや娘さんと同じことを言うんです。「自分はこうこうこういう病気で、女房と娘に言ったら悲しむだろうから言えないんだけど、でももう本当に先が長くない。話したいことも話せないんだけど、どうしたらいいだろう。」と。つまり、先程言ったシシリー・ソンドースさんの話していたことなのです。家族だからこそ、痛みを感じて言えないのです。それを繋いでいってあげたり、サポートしていつてあげるとというのが、本来のホスピスの目的だったのです。ところが、そのホスピスは何処に行ってしまったのでしょうか。

今の日本の緩和ケア病棟では、まず身体的な痛みをとることが第一だと言って、家族を一つにするよりも身体的なペイン・コントロールを大切にしている様に思います。ホスピ

スの本来の目的は、シシリー・ソンドースさんが言っているように、何十年いろんなことを分かち合ってきた家族が、人生の中で一番大きな出来事である死と死別という現実の問題を話し合えない苦しみを共に考えること、そして援助することだと思うのです。単に痛みの告知をするかしないかといった技術的な問題ではありません。

先程の患者さんと奥さんと娘さんの場合ですが、ご主人に、「娘さんと奥さんが 2、3 日前に今、ご主人が話されたことと同じことを話されて、苦しんでいましたよ。」と伝えました。その結果、一緒に 3 人で話してみようかということになり一緒に話し合いました。いろんな話をしました。感謝の気持ちや別れの痛み、それに、お葬式やお墓の話などなど。

そういうことを話し合うことが幸せとか嬉しいということではありません。悲しいし、痛みが伴います。しかし、一人で悲しむのではないのです。大切な家族の皆で辛さや悲しみを共有するとき、そこには温かい人間のふれあいがあるのです。そこに勇気が生まれてくるのです。どんなに死の準備教育を行ったとしても、悲しみはあります。痛みもあります。怒りもあります。それが現実だし、死別の痛みなのです。だからこそ、家族が一つの家族となって、家族にとって、今一番大切なことを共有すること、それが、本来のホスピスの目的だったと思うのです。痛みを取るというのは、大切なことですが、ホスピスの目的ではありません。それは目的のための手段の一つです。手段が目的になるのは、僕はこんなつまらないことは無いと思います。で、「ホスピス」の本来の目的を今一度、みんなでもう一度考えてもらいたいと願っています。

僕の大好きな本の 1 つに、「星の王子さま」という本があります。皆さんもきっとお読みになったことがあると思いますが、23 ページにこんなことが書いてあります。

「大人は数字が好きだから、新しい友達のことを話しても、大人が一番大切なことはなんにも聞かない。『どんな声をしてる?』とか『どんな遊びが好き?』、『蝶のコレクションをしてる?』といったことは決して聞かず、『何歳?』、『何人兄弟?』、『体重は何キロ?』、『お父さんの収入は?』などと聞くのだ。そうしてようやくその子のことがわかった気になる。もし、大人に、『バラ色のレンガで出来たすごくきれいな家を見たよ。窓辺にはゼラニウムがいっぱい咲いていて、屋根には鳩が何羽もいるんだ。』と話しても、大人はうまく想像することが出来ない。それにはこう言わなくてはならないのだ。『10万フランの家を見たよ。』すると大人たちは歓声を上げる。『それは素敵だろうね。』」

僕はこの箇所を読む時に、お医者さんや看護師さんには申し訳ないけれども、「医療者は数字が好きだから」と読み違えてしまいそうになります。患者さんたちはいろんなことを話すのに、どんな気持ちで話しているのか、お医者さんや看護師さんはわかってくれないって言っているみたいに――。

「ここ（ホスピス）に寝ていると、まるで棺桶に眠っているみたいだ。とても寒いし怖い。」と話していた患者さんがいました。死の怖さ、不安でいっぱいなのです。どんなに景色がよくても、どんなにきれいな個室よりも、家族の顔が見たいと話していた患者さんもいました。人はいろいろな思いを抱いて生きているのです。

ホスピスだとか緩和ケア病棟に来た患者さんの多くが、一番最初に返事に困るという医師やナースからの問いかけがあります。1から5までの痛みのスケールを見せられて、どれだけ痛いのか、数字で示してくださいと言われることです。人間の痛みや苦しみは数字で表せないところが多々あるのです。

物事を客観的に見るのには数字も大事だと思います。医学用語は、どこがどれだけ破損しているかを計量化して数字で表して患者さんに説明しますが、肝臓癌の末期で亡くなる前の患者さんが、「死ぬのは怖くない。だって俺の肝臓はもう機能していなくて、死んでる

んだよ。その死んでる機能にね、看護師さんやお医者さんが来てあれこれ説明するけれど、そんなことじゃないんだよ。この死んだ機能を体の中に抱えて生きてることが怖いんだよ。」

患者さんが、「先生、僕の肝臓どうなってるんですか？」と問うとき、「あなたの肝臓は・・・」と、機能的に計量化して説明されることではなく、患者さんがどんな気持ちで自分の体について話しているのかを聞いてあげることが大切だと思います。

痛みの緩和という場合も、身体的な痛みだけでなく、生きることの痛みもあるのです。「何でこの子を残して死ななきゃいけないの？」と言った 40 代の患者さんがいます。主治医と僕とで一緒にその方を訪ねた時、主治医に、「先生は優しい、とってもいい先生だけど、先生がしてるのは小手先のことでしょう？痛みをとるだけで。私は癌の末期でもう助からないんですよ。」と怒った様子で話し、次に僕に向かって、「カウンセラーって言ったって、心なんか朝、昼、晩、変わります。そんなことが苦しいんじゃないんです。何でこの子を残して今、死ななきゃいけないの？そのことが一番苦しくて、私の問題なのです。」と訴えるように話していました。糖尿病の患者さんや、他の慢性疾患を抱えて生きている患者さんも、問います。「何でこの私がこんなことになったの？」と。癌の末期の患者さんも、ホスピスの患者さんも、同じです。そこで問うてることは、「私」という存在はいったい何なんだということなんです。自分の存在の根拠が確信できないと、死んでも死に切れない程苦しく、心が痛むのです。

もうひとつ、70 代の男性の患者さんでした。ホスピスに運ばれてきて一週間ほどの間、疼痛がひどくて、背丸め口も聞けずにベッドにうずくまっていました。一週間くらい経った時に、車椅子に乗って食堂に行くところに出会い、車椅子に乗って一人でやって来るその人を見て、僕は思わず声をかけました。「よかったですね。」と。そうしたら彼から、「今の方が苦しい。車椅子に乗って食堂に行けるけれど、どうせあと一週間か 10 日もしたら死ぬんだろ！こんな風にただ死を待ってるだけの日々には意味が無い。意味の無い人生を生

きているのは生きるよりも苦しいよ。」という言葉が返ってきました。死にたくはないけれど、生きていることの方が苦しいこともあるのです。この患者さんは、「そんなことを考えたら、この病棟に運ばれてきた時に死んでいたら、あんなに一週間苦しまずにいられてよかった。こうやって死を待っているだけの苦しみも無かったし…。そんなことを考えてたら、癌だと診断された時に死んでいたら、経済的に家族にこんな苦しく辛い思いをさせなくて済んだから、その時死んでいた方がもっとよかったですよ。そんなことを考えてたら、家族もいない方がよかった、結婚しない方がよかったかもしれない。」そんな話をしていました。自分の人生、生きてきた意味が見出せないほど苦しく、心に痛みを感じる空しさは、他に無いように思います。それで僕はその人に、「そんなに意味が無くて、無駄な人生がどんなものだったか、聞かせてくれませんか。」と言って、その患者さんの話を、夕方の5時ごろから、夜中の12時ごろまで、物心ついてからのその人の人生を聞いていました。話し終えた後、彼は、「そうだったのか、俺の人生は、いい人たちに出会って来たんだな。今こうやってあんたと出会ったみたいに、明日もまた誰かと出会うかもしれないよね。あと一週間か、10日かもしれないけど、明日が楽しみだ。」という言葉聞いて家路についたのです。

僕は人というのはどんな時にも、どんなに痛みや苦しみがあっても、自分でそれに立ち向かう力と能力は持っていると思っています。ですから、本来豊かな人生を生きている患者さんを末期患者という風に小さな枠に閉じ込め、牢に入れたり、計量化してその人を見るのではなく、その人が今、ここでどんな気持ちで生きているのかに耳を傾け、受け止め、理解して共にいることの大切さを思います。人間をただ単に身体として捉えて、それを機能的、生理的に見て計量化し数字で表す以外に、そこには希望であったり絶望であったり、喜びであったり悲しみであったりという豊かで広くて深い人生があるのです。そのことを心に留め、患者さんとその家族を支え、援助することが本当のホスピスの目的だったはず

なのです。疼痛の管理を目的として専門家の尺度で「痛み」を判断し、患者さんや家族の意思決定という能力を奪うことは、その人の豊かな人生を軽量化し縮小したものにしてしまいます。患者さんや大事な人を失くす不安や恐れの中で生きている人たちのそばにいて、彼らがどんな気持ちで生きているのか想像し理解することに時間と心を使ってあげて欲しいと思います。そしてその人が泣きたかったら、泣く手伝いをしてあげることです。わめく手伝いをしてあげることです。そうしたらその人たちは少なくとも、一人ぼっちで痛みや孤独に耐えるだけの空しい人生ではなくなります。その中には先程の患者さんが言うように、「人に出会う」喜びや温かさが生まれ、人生を豊かにしてくれると思います。どんな病気であっても、治療を受け、治って生きていくことの意味を考えていくこと、例え死を前にした日々であっても、生きていることの意味や根拠を患者さんと共に探し、見出し、患者さんの生きる手伝いをするのが医師の勤めのひとつだと考えています。それが、本来のホスピスの目的だったと確信しています。

#### 引用文献

1. 『新約聖書 マタイによる福音書』
2. サン=テグジュペリ作, 河野万里子訳 『星の王子さま(新潮文庫)』 新潮社 2006

### 【講師紹介】

1943年生まれ。酪農学園大学卒業後、農村伝道神学校でカナダ人宣教師の助手を勤め、1968年アメリカへ留学。1974年エモリー大学神学部修士課程修了。2年間の牧会カウンセリングのインターンをアトランタ市グレーディ・メモリアル・ホスピタルで終えた後、スタンフォード大学病院、ミネソタ大学病院のチャプレンとしてカウンセリングに従事。1985年帰国。ライフプランニングセンターホスピス準備室およびそのチャプレン。1992年から2008年3月まで、東京女子医科大学糖尿病センターチャプレン。

2009年10月現在、山梨英和・韭崎英和・石和英和幼稚園園長。山梨英和大学講師。

訳書『なぜ私だけが苦しむのか』 クシューナー著（岩波書店）1998.7

『死にゆく子どもの世界』ランガー著（日本看護協会出版会）1992.9

『牧師による診断』プルイザー著（すぐ書房）2004.12 など

共著『いのちの時間』（新潮社）1995.12 など

この要旨は、当日の講演を元に、山梨大学附属図書館医学分館で一部語句等の修正を加えたものです。